

フッサール現象学における想像力の教育学的意義

渡辺 英之

WATANABE Hideyuki

序 現象学的想像力論

開かれた教育の可能性は、閉塞性を突破する開かれた能力に定位することにおいてしか成立しない。しかし閉塞性が人であることの条件性を閉鎖的に形成しているなら、脱条件性に定位する教育は、消極的な解体にしかならない。とはいえ人間の条件性をなす世界性は、行為の成果を絶えず沈殿させる形成体であるとともに、それによって能動的行為を可能とする地盤でもある。世界のそのような両義性が、人間存在を両義的なものとして可能としている。あるいは同じことであるが、能動と受動との絡み合いとしての人間の志向の両義性が、世界の生成を可能にしている。そのような両義的存在として、人は常にすでに閉じられてあることによって開かれている。自意識の球体に自己を閉塞することによって、自己を形成する球面に外部を感触している。外部に感触されて、人は閉じた球体の内部から外を夢見る。そのように限られた仕方、人は常にすでに開かれてある。

しかし人間の独特な閉鎖性が開放的なものとして可能になっているので、逆に開放性は閉鎖的にしか可能ではない。未知は既知に回収され、単独性は個性に収奪される。マニュアル恋愛、偽装家族のストーリーが共有されれば、物語がリアルな現実に転化する。家族の団欒は、TV画面に映る家族の団欒物語の影を再生している。人の物語が常態化すれば、想像力も人に収奪される。かといって原初の想像力は、遠いかすかな記憶の痕跡にすぎない。価値評価を度外視すれば、そのような現実の夢想性、夢想の現実性が人の現実を形成している。

開放性を遮断して閉鎖的に形成の道を指定すれば、教育も閉じたものとして可能になる。しかしそうした一義的指定の可能性そのものが、根本的転回によって、つまり人間の未規定性によって可能となる以上、閉じた教育は始めから始源の転倒によって基礎を仮構しているのである。だからこそ、人間の常態に定位しようとする、教育は両義性から始めなければならない。現実と非現実、内在と超越、閉じてあることと開かれてあることの絡み合い。想像力とは、人間のそうした未規定性を常にすでに両義的に常態化している仕方を名指す、問題名称である。

思考や感情や意志、あるいは諸他の能力と並べても、想像力が教育にとって重要な意義を持

つことは、改めて強調するまでもない。しかし想像力の独自性を、文学的あるいは美的・芸術的想像力として特権化することは、想像力を没領域化して逆に手なずけて囲い込むことにしかならない。特権化して囲い込めば、想像力をめぐる様々な架空の物語が捏造されるだけである。まずそうした物語を遮断して、想像力を一つの体験様相として切り出し、想像力の身近な働きを人間の原初的条件性として究明する必要がある。そのようにして体験源泉に還帰するとき、究明は現象学の圏域を動いている。

しかし現象学の方法を、単に想像力の究明に外から接合して適用しようというのではない。現象学における想像力の捉え方には、何か独自で積極的なものがある。その独自性はさしあたりもちろん、現象学が体験をその固有な様相のままに記述しようとすることに由来する。人間の諸能力の体系的図式を前提し、そこから想像力を類比によって説明しようとする理論は括弧に入れられる。想像力は薄められた現時的知覚、ないし現実的経験の影なのではない。とはいえフッサールにおいて、一切の体験は現時的知覚の形式に還元されることによって基礎を付与されるのではないのか？ それはある点では確かにそうなのではあるが、だからといって、当然ながら一切の体験が知覚に遡源する定立的意識であるのではない。現象学的反省そのものは、知覚の指定性を括弧に入れた独特な中和的意識なのである。そのような「中和性変様」の一つとして、現にそうあるものを別の可能性において構想する力である想像は、現象学的反省の要でもある^(注1)。

「現象学においては、すべての形相的学と同様に、準現前化というものが、もっと正確に言えば、自由な想像(Phantasie)というものが、知覚に比べてある卓越した位置を獲得するのであって、それどころか、知覚そのものの現象学においてさえそうなのである」(S.147)

よく言えば、想像力が学ないし思想の根本的に新しい可能性を開示する。悪く言えば、想像力は、学の厳密性を放恣な物語で汚染する。しかし想像力は便利な道具である以上に、人の両義性を根底において規定している現実そのものである。想像力の究明は、生成・反転する人間的現実の両義性の究明に等しい。

中和性変様としての想像

まず、素朴かつ連想的に記述することで、想像力を究明するための視圏を確保しよう。さしあたり想像力とは、現在しない存在者の像を意識の中に造形する能力である。私は今、この文章を書きながら、隣の部屋の様子を思い浮かべることができる。ある知人の行動を想像することができる。反復された過去に準拠して予想しているのなら、想像された情景は、偽でありうることによって真であることもできる。しかし功利的有効性を別にするなら、想像は現実的

中する必要がない。想像は無偽に関係なく、形象を自由に編成する働きだからである。そのようなものとして想像力は、夢見る力である。独特ではありながら、夢は夢であることによって、現実の経験を通して沈殿した形象に、したがって過去に準拠している。形象を結合する可能性は無限だろうが、結合の文法はいつも、いつかどこかでを反復している。

だからといって、想像された形象の体験は薄められた疑似現実なのではない。想像力は表象を把持し、把持された表象を駆使して別の表象を編成する力、そのようにして現前していない対象を現前しているかのように保持する力である。したがって想像力は認識ではないが、感覚を悟性に仲介することによって経験を成立させる経験の契機である^(注2)。その場合想像は、感覚に準拠して認識にまで取り纏められる必要がない。想像力は知覚に由来するが、想像力は構想する働きとして独自の領野を作り上げる。それに対して、認識は特定の知覚を断面として支える予料の地平を随伴しているので、広義の想像的次元に取り巻かれている。想像力は、知覚や認識の影というより、知覚現在と重なり合ってそれを包括する広大な領域を形成している。

最広義における想像の働きによって、現在の知覚、知覚の現在が可能になっている。不在のイメージを再生する働きとして、過去の想起、想起された過去が可能になる。同様に、予想する働きとして、未来の予料、予料された未来が可能になっている。想像力が、人間の時間性を可能にしている。というより、時間とは、語の最も広い意味における想像力ないし構想力として現実化されている。そのようなものとして、想像力は人間存在と拡がり等を等しくしている。

素朴な描写ながら、ここですでに想像力に関してひとつの視角が切り出される。素朴な領域範疇を前提すれば、想像力は内在と超越、現実と夢想、事実と幻覚など、人間特有の両義性の片側に割り振られる一側面である。夢想への耽溺は現実逃避であるが、理想主義的には理念に向けて漸進的に上昇する能力でもある。いずれにせよ夢見る力と現実を支える力の双方をどう評価するかは、コインの両面のように互いに支え合っている。反転図式の通例として、地と図を同時に見ることはできない。

そこでまず、別の能力と対比して消極的な差異を通して想像力を記述する際の図式そのものが括弧入れされなければならない。そのようにして初めて、想像力の現象学的究明が可能になる。

しかし学の基礎づけという観点からすると、想像力の究明は現象学の鬼門であるかに見える。想像は、事物の有体的現前の体験と異なり、事物を意味として保持する志向の直観充実を欠いているからである。ところが、志向的分析において様々に絡み合った志向の解きほぐしを可能にする場所、それが想像空間なのである。例解しよう。

例えば現象学的解明はたいいてい、通常事象の有体的現前の意識、すなわち知覚から始まる。庭を一匹の猫が通りすぎる。猫好きの私 は、それを好ましい出来事として受け取る。三毛

猫である。三毛であるからには雌なのだろう。その姿が、かつて5年ほど前に飼っていた似た柄の ミケ を思い出させる。ミケ がまだ生きていたら、こんな風にここを歩いているだろうか。一瞬目の前の三毛とミケが重なり合うが、ミケは記憶の内に流れ去って、眼前にどこから来たかも分からない三毛猫が残る。そのような意識の流れを、広大な潜在的な定立の地平が取り囲んでいる。主題的了解の背景に、周囲の地理的環境が、人と猫、人と自然などの文化環境の理解が潜在的に措定されている。さらにそれらを包み込んで、空間的・時間的にのび広がる一つの世界が、非主題的に生きられている。さらに ミケ の記憶現出が、ありえたかもしれない現実の可能性を一瞬交錯させるが、可能世界は背景に退くことによって、この世界が唯一の世界として単独性を取り戻す。ところがよく見ると、三毛であるかに見えた猫の黒色は、単なる泥であるのに気づく。それは三毛猫ではなく、単に二色のぶち猫であった。定立的意識は、修正される。だからといって、体験の流れそのものは抹消されるのではない。錯覚であったにせよ、その時のさりげない三毛猫体験はそれとして確かにそのように体験されたのである。

目の前の猫が、真実三毛猫であるかどうか、そもそも猫であるかどうかは、その時々の意味体験を左右するものではない。志向的分析においては、事象がリアルな現実的存在であるか否かの判断は中和化されている。「中和化(Neutralisierung)」、「中和性変様(Neutralitätsmodifikation)」とは「実行成果を作り出す働きを中止し、作用の外に置き、括弧に入れ、未決定のまま宙づりにしておく、……もしくは実行の成果をそれに関与することなしにただ単に思い浮かべる」(S.248)働きである。中和性変様は、そのまま想像なのではないが、想像は一種の中和性変様である。そこでは、「理性の正当性の判決」、「理性と非理性の問いは何らの意味を持たない」(S.249)。

こうした独特な活動空間において、想像は、意味を意味たらしめる不変の核、意味相互の結合分離の法則をイデア的なものとして取り出す自由変更として機能する。さらにノエマの核Xを意味たらしめる意味的本質をめぐる定立的諸作用の「諸性格」(Vgl. S.210)を、すなわち現実的、可能的、蓋然的、可疑的等の存在様相の段階的形成を解きほぐす中和化的意識の範例として働く。考察のこの段階で、想像は中和性変様と区別されない。先に挙げた 私 の猫体験の一切が、架空の範例的出来事だからである。仮に範例として庭に登場するのがトラだったとしても、トラが登場したかもしれない必然的連関の宇宙が、構想されなければならない。

するとこの段階で、現象学では想像力に対して、対立する異なった三つの意義が割り振られることになる^(注3)。第一に、意味のイデア的連関を取り出す自由変更としての中和性変様、他方では第二に、主題的に現前しない信念の相関者としての世界という地平、それを一致的調和的に生きる生の地平を包み込む一つの宇宙の定立を支える潜在的意識の働き、そして第三に、それらと並行して考えられる狭義の想像力の仮構する機能、すなわち世界生の調和的流れにこ

だわらず、自由かつ荒唐無稽に形象を操作する働きである。想像力の機能を狭隘化する必要はないが、とりわけ想像の第三の意味を他の二つの意味から区別する可能性が究明されねばならない。今少し、フッサールによる規定をより厳密に追ってみよう。

フッサールによれば、素朴な意識は必ず定立的意識であるが、定立的意識と並行して現実性の指定を伴わない独特な意識様態が可能である。それが中和性変様の意識である。定立的意識は、すべて先に述べたような中和性変様を蒙ることができる。すなわち体験でありながら、体験されている事象が現実的であるか否かの判断が保留されている意識へと変換可能である。同一の意味についての体験でありながら、意味される当の実在に関しては疑似定立的意識が伴うだけである。「あたかも...であるかのように」の意識体験、あるいは「疑似 - 知覚 (Quasi-Wahrnehmung)」^(注4) にあって、理性の判決は問題にならない。

まさにここでこのように規定された意味において、想像は一種の中和性変様である。知覚の中和性変様の一例として、フッサールは「銅版画の知覚」の例を挙げている (Vgl. S.251f.)。有体的に現前している銅版画を通して、模写された実在物である「馬上の騎士」が体験されている。馬上の騎士は、存在しているものとしてではないが、存在しないものとして体験されているのではない。存在・非存在に関する判定を宙づりにした意識において、それはまさに写像として現実的に体験されている。

現象学にとって、中和性変様を写像化された意識として記述することの意味は大きい。知覚は知覚であって、写像意識ではない。ところが現象学的には、知覚と写像体験から共通に、ノエマ的意味と意味をめぐる入れ子型に錯綜した諸性格が取り出されてくる。ということは知覚はその有体性においてではなく、写像としてしか問題にならないのである。写像をあたかも現実であるかのように生きること。志向的分析は、それをさらに押し進める。現実を写像であるかのように、したがって、現実をあたかも現実であるかのように体験すること。現実をあたかも現実であるかのように？ その時この現実の体験は、別様でありえたかもしれない可能性の一つの成就として相対化されている。にもかかわらず、まさに他ならずこのようにある現実意味の成就として、今ここにいる私の体験として単独化されている。この意味で、中和性変様とは、無限に可能な可能世界の構想の中からある意味連関を唯一のモデルとして範例化する想像の現実化様相なのである。狭義の中和性変様は、広義の想像の自由な飛翔を養分としている。

他方では、このように写像意識を手引きとすることで、狭義の中和性変様と想像との区別が切り出されてくる。写像体験は、現にそれとして現前している銅版画ないしそこに描き出された形象についての中和性変様なのである。知覚に遡源する写像意識は、想像ではない。そこから次のように帰結される。

「想像変様は、準現前化として反復可能である (任意の段階の想像、つまり想像の中での想

像というものが存在する)のに対して、中和化という操作の繰り返しは、本質上ありえない」(S.252f.)

銅版画についてのフッサールの説明を読んでいる読者は、銅版画を直接体験しているのではない。写像化ではなく想像しているだけである。それにしても、本に印刷されたインクのシミの現前を中和化して、それを通して提示された意味を志向している。紹介されているのは銅版画であって水墨画ではない。知覚は、現前する事象に遡源する。想像は、準現前化された形象に遡源するだけである。

かくして想像は、端的に次のように規定される。

「想像作用 (Phantasieren) とは一般に、定立的な準現前化 (Vergegenwärtigung) の中和性変様であり、したがって、考えられうる最広義における想起の中和性変様である」(S.250)

広義における想起の中和性変様、あるいは中和化された想起とは、一体どのような体験だろうか。

定立的な準現前化とは、例えば今、ここにいる私が、隣の部屋の様子を思い浮かべる場合である。現在しない事象を心の中で形象化する、その意味でそれも広い意味での想像である。しかしその想像は定立的である限り、偽でありうることによって真であることができる。ところが中和化された意識に、真偽は問われない。隣の部屋の物音は、天井裏に開いた異界への通路から来た異形の怪物がたてているのかもしれない。怪物を倒して通路を抜けると、ホビットたちとの冒険が待っているのかもしれない。よかれ悪しかれ、こうした放恣な空想は、中和化されている。それは知覚の中和性変様と異なり、現実を現実であるかのように変換するのではなく、よくても空想を空想であるかのように反転しうりだけである。

最広義の想像は、今ここにはない何かの像を思い浮かべることである。ここにはない 金の斧は、どこかにあるとは限らないが、かつていつか体験的に提示されたのでなければならない。斧として、金として、さらに結合されうる素材と形式の総合可能性として。その意味でそれは、かつて生きられ了解された現在の準現前化ないし再現前化、ということはつまり想起の中和化なのである。狭義の中和性変様が知覚の写像化であるように、中和性変様としての想像は、生きられた現在の再現前化の写像化である。コピーがオリジナルに、影が光に寄生するように、想像は原初の知覚現在の變様としてのみ可能なのである。

だからといって、中和性変様としての想像の力、ないし想像力を包括する中和性変様の力が滅殺されるわけではない。なるほど中和性変様は定立的意識の影であるが、それによって一切の定立的意識と拡がり等を等しくする。

するとフッサールは中和性変様によって、転回によってのみ可能になる現象学的態度の新奇さとしての超越性を、それによって内在化しようとしている。エポケーを普遍的に遂行するこ

とによって可能になる態度変更は、根本的に新たな転回であるが、それを可能にする手続きとしての方法は、常にすでに可能であるというのでなければならない。そのようにしてフッサーは、超越と内在を隔てる深淵を浅瀬のところで乗り切ろうとしている。

しかし問題は、現象学よりも想像力である。想像力を想起に係留させる、その事情はよく分かるが、しかし想像の力は、過去の再生にではなく、未知を予感するような未来に向けて人を開くところにあるのではないのか。そのように希望的観測から評価を予断する前に、事象に即して想像力の力を見届けなければならない。

想像力は、けっして現前することのない事象に定位している。そこで想像力をめぐる究明は、現前しないが素朴に経験されている事象、すなわち過去と未来を孕む時間の流れを問題化しうる事象領域へ移行することになる。

想像と想起をめぐる謎

写像意識であれ括弧入れとしての中和性変様であれ、最広義における想像の働きは、非現実を現実であるかのように、あるいは現実を非現実であるかのように、さらに現実を現実であるかのようにといった意識変様の可能性に、したがって現にそうであるところのものではないかのようにという別様の意識の可能性に支えられている。他方当然ながら、写像意識は写像を可能にしている代理現前に、括弧入れは括弧入れされる当の存在措定に、別様の意識は現にそうである事実性に準拠して、そうしたものの変様としてのみ可能である。すると中和性変様や想像は、現にある世界とその世界に生きる私の存在の事実性に対して距離を設立する働きであると考えられる。それが任意の創作、恣意的創造にすぎなければ、中和性変様を養分とする想像や志向的分析は、放恣な幻想の領界に囲い込まれるだけである。ところが写像意識や想像は、現に素朴に生きられている。現前していない何かを保持する働きによる造形物は、広大な人間の現実を形成している。現在している何かは常に、現在しない何かあるいは潜在野によって可能になっている。

こうして想像力をめぐる究明は、時間性をめぐる哲学的諸問題に行き着く。フッサーによれば、想像とは定立的な準現前化すなわち想起の中和性変様である。と同時にそのようなものとして今現在の体験である。想起された過去の出来事は、今はもう過ぎ去っている。しかし過ぎ去って今はもうないものとして、今現にある。今在るものとしてはないのだが、ないものとして今存在する。ないのにもかかわらず今在るというだけでなく、まさにないことによって、ないものとして今在る。想像力の場所は、そのような逆説によってしか名指されることがない。

ではフッサーにおいて、そのような存在の不在あるいは不在の存在、ないし両者の交錯は

どのように究明されているだろうか^(註5)。

実のところフッサールにあって、過去ないし未来など、総じて直接現前しないものとして与えられないし生きられる事象は、現象学的に究明を必要とする問題名称であるというにとどまらない。一切の志向とその形成体である存在者ないし存在意味を、直観充実によって批准させる現象学的正当化の原理にとって、原理の普遍妥当性を脅かす困難を意味するのである。事情は次のように整理される。

過去と現在と未来へと様相区分された直線的流れとしての客観的時間を遮断することによって、直線的流れをそのように構成している今現在の志向が残る。さらに抽象化によってではなく、理念化としての形相的還元 (Vgl. S.16) によって、過去を過ぎ去ったものとして再現前化する想起の働き、次の瞬間を予料して事象の到来を待ち構える予期の働き、それらと絡み合っただけで想起や予期とは区別される現在の志向、それらが、不可分に絡み合っている現在の志向として理念的に析出される。その場合、過去はけっして現前しないので、志向としての想起は知覚のように充実されることがない。アノ出来事ハ、本当ニソナ風二起コッタノカ？ それを決するのは、今現在に残る痕跡を一致的調和的に整合させる今現在の生にしかない。ところが、今現在の志向を現に生起するがままに取り押さえることはできない。知覚であれ想起であれ、絡み合った志向は今現に生きられているが、反省的に捉えようとするとき志向は志向されたものとしてしか捉えられない。今現在の志向は捉えられたときには、既に過ぎ去った過去の志向として経過してしまっている。反省は反省自身を捉えられない。一切を反省しようとするこの限界は、反省自身も一つの体験として不断に流れているからである。他方、客観的時間という直線軸を前提しないとすると、現在は絶対的な原点なのだから、不断に流れるものとしての今は、けっして動かず、それ自身としては同じ所に止まっている。流れる今は、止まっている。それを「流れつつ、とどまる生き生きした現在」といえば、時間の謎を集約的に名指したことになる。

フッサール自身は、謎を究明不可能な現象学の困難と考えていたわけではない。現前化と再現前化の働きを今において峻別することによってである。さらに他方では、想起、現在化、予期の三者のそれぞれを、「過去把持 (Retention)」と「未来把持 (Protention)」の働きを介させて繋げることによってである。

「過去把持と再生の相違」と題された19節では次のように書かれている。

「再現前化的記憶と、今の意識を拡張する第一次的記憶との間に根本的な現象学的相違の存することは、双方の体験を注意深く比較してみれば明らかである」(S.38)

「原的な今を再生された今へ変える意識の変様は、原的な今であろうと再生された今であろうと、とにかく今を過去へ変える場合の変様とは全く別種のものである」(S.39)

要するに再現前化的記憶と第一次記憶は、「構成された統一体と構成する流れとの相違」に等しい。再現前化としての想起は、過ぎ去った今における構成を再び浮かび上がらせるにすぎないのに対し、第一次記憶、すなわち過ぎ去りつつある印象の把持ないし衰退は、今現在の流れを構成する生き生きした現在の成分である。

にもかかわらず、印象の衰退を今における把持として可能とする原的な今のそうした刻印によって、想起がまさしく想起として可能になる。想起された過去は現在から峻別されるが、想起されたものはかつて今現在の流れの位相の内ですでに衰退した今として刻印されることによって、あるいは今の内で過ぎ去りつつある位相として融合し合うことによって、過去として再現前させられうるのである。

志向のそうした峻別と連結を、フッサールは方向性を異にする志向の二重化としても提示している。引用しよう。

「過去把持という意識の射影は、すべて二重の志向性を有している。その一つは音という内在的な客観の構成に役立つ志向性であり、我々が音の第一次記憶と呼び、またはさらに明確には音の過去把持と呼んでいる志向性がそれである。もう一つの志向性は、流れの内にあるこの第一次記憶の統一を構成する志向性である」(S.68)

「横の志向性」と呼ばれる前者において、経過した音の系列の第一次記憶の変遷の内に統一性が経験されるのに対し、後者「縦の志向性」は、すでに経過した意識の過去把持された系列そのものを把握ないし構成する。わかりやすく単純化していえば、直進的に流れる横の志向性と垂直に交差して、想起や再現前化の働きによって縦の時間系列が同時に構成されている。ただし、両者は外的に協同し合う二つの機能なのではなく、流れが流れとして自己現出する際の二重の側面であるにすぎない^(注6)。

以上は、「立ち止まりつつ流れる生き生きした現在」をどのように究明しているだろうか。今一度素朴に振り返ろう。

立ち止まりつつ流れる現在の生動性の謎。とどまりながら流れていることの矛盾。しかし流れている川が、川としてはそこにとどまることに、何の矛盾もない。ならば川としての形式を前提せず、何かが流れつつ同時に止まっていると試みよう。流れているものは動いている。とどまるものは静止している。だから何かが動いていると同時に静止しているといえ、矛盾、あるいはパラドックスになる。特定される何かが対象として明確であれば、そのようなことはありえない。そうした矛盾によってしか名指されることがない、それが可能なのは、事態の形式と内容、事態の存在と認識との間に絡み合いが生じているからである。現実には、運動と静止はただ相対的にのみ区別されるにすぎない。何かは常に、時空の内を運動している。が運動は、任意の静止点に対して相対的に測定されるにすぎない。原点を絶対的準拠点として設定す

れば、原点に対して一切は運動している。静止しているものが存在するとすれば、それは原点そのものであるか、あるいは原点の影であるかのいずれかでしかない^(注7)。

そこで問題は、絶対に静止している原点が運動を可能にする、あるいは運動によって初めて静止した原点が可能になるという事態である。

川の比喩が曖昧であれば、例えば一つの論文を時の流れとしてみよう。単純化して、序あるいは結び、また章の始めや終わりに流れずに俯瞰して振り返ったり先取りする部分があり、それ以外に論述ないし叙述の流れの部分がある。それぞれを志向的に分析すると、俯瞰して纏める部分は、全体を目配せするという視点の移動によって、逆に流れている論述部分は、視点をむしろ当該テーマにとどめることによって可能になっているのが分かる。丁度電車から車窓の風景を眺めているとき、視点を固定すると風景は流れ、逆に風景の一点を注視する場合にはその間視点を対象にとどめるために動かす必要がある、というのに似ている。客観的時間の直進図式を遮断して比喩にとどまるなら、とどまることは流れることによって可能になる。逆に根源的な流れはとどまりによって可能になるとまでは言えないにしても、とどまることが流れの認知を可能にしている。流れることは、とどまることの存在根拠であるが、とどまることは、流れることの認識根拠である。

さらに現象学的に解釈すれば、こうなる。存在と認識は、並び合う二つの述語ではない。存在と認識は、現象学的な生、あるいは体験の展示形態の両面である。したがって先の言表は、流れることはとどまることの体験根拠であるが、とどまることは、流れることの体験根拠でもある、と言い換えられる。

以上はフッサールの次の言葉を、冗長に解説したものにすぎない。

「構成するものと構成されるものとは互いに合致する。とはいえ、あらゆる点で合致するのではない」(S.71)

以上を踏まえ、想像力に関する帰結を整理しよう。

フッサールによれば、想像は定立的な準現前化の中和性変様であった。その限り、想像は定立的な現前化に遡源する。ところが、根源的時間を流れとして湧出させる志向の二重性は、準現前化を現前化の、中和性を定立性の影として記述することを禁止する。横の志向性は変転を現にそのような流れとして常にすでに構成しているのだが、流れとしての自己呈示を可能にするのは、縦の志向が働くことによってでしかない。そして縦の志向の反復は、横がすでに流れとしての持続であることによって可能になっている。その意味で、ここでは、構成するものと構成されるものとは互いに反転する。絶対的な根源の流れ自体について語ることはできない^(注8)。にもかかわらず、存在と認識との相即において、そこでは流れ自体の運動が記述されている^(注9)。

始源において、起源と反復、オリジナルとコピー、現前と不在、真実と虚構、したがって現実と想像は、互いに通底している。通底し合うものとして区別され、区別されうるものとして融即している。それは、一方で超越論的現象学の未完結性と歴史性を帰結する。しかし他方では、想像力の力の所在を究明する糸口を提供する。

想像力は、知覚の影なのではない。とそんな風に端的に価値評価の軸を反転するのではない。依然として想像力は知覚の影、反復された知覚の中和化なのである。ただし、知覚の現在、現在の知覚の流れが準現前化に支えられているように、中和性変様が定立を、したがって想像力がこの唯一の世界に生きている私の単独性を可能にしている。比較されうる差異の独自性としてではない。私は というその時に、名指されることなく沈んでいった私たちの痕跡を背景として、否応なく私は単独化されるのである。差異として比較されうる特殊性を課題とする個性化の教育は、責めの気分によって人を駆り立て標準化することになるだけである。個性なるものは、想像力を無限に開放することを通して今在る私を相対化しうる能為性の内にしかない。風化しつつある私に耐えながら、それでも想像上の「我思う」を限りなく繰り出し続けるところにしかない。

次章では、現象学的想像力が孕む、教育的含意をさらに展開する。

想像力のアイロニー、アイロニーとしての想像力

あえて現象学の森に踏み込んで、フッサールの時間論を手引きとして、想像力の謎めいた働きについて究明してきた。テーマの自然な流れからすると、以下の考察では、たとえばフッサールにおける時間性の究明において過去把持に比較すると予期ないし未来把持に関する論考が不十分であることを指摘し、そこで修正された想像力に関する洞察のいくつかを、教育の場面に応用するという展開が考えられるだろう。しかしそのような常道的なやり方、決め事に沿った流れを、想像力は拒絶する。なにも想像力に関する論考が、想像力の開放を求めるというのではない。想像力の可能性を特権化し、逆に一つの特異な能力として囲い込んで教育に応用しても、たとえば芸術教育の意義を改めて持ち上げる程度の確認にしかならないのではないかと、そうした疑念が、想像の力をさらに開放しうる独自の方途の可能性の究明を促すのである。

改めて確認するまでもなく、個性や自律性や創造性、あるいは社会性や統合などの概念や理念、さらに人間形成をめぐる様々な方策が、教育ないし教育論の場面に導入されると、もとの志向の反対物に転化するという事態については、周知のことである。個性や創造性は、教育課題として学校的文脈におかれると、常態化した競争原理をさらに内面的に浸透させる推進力として作用する。場合によっては、教育におけるそうした反転を逆手にとって、単なる調教が自

律に向けての他律と僭称されたりもする。このような事態の反転を教育のアイロニーと名指すなら、教育のアイロニーに汚染されやすいのがまさに想像力の宿命である。想像力の教育の名による想像力の馴化ほど、厭わしい事態はない。

しかしながら他方、すでに確認した通り、想像力自身が事象の意味を反転させる力であった。想像力の間相において、非現実が現実であるかのように、現実が非現実であるかのように、さらに現実が現実であるかのように、そして非現実が非現実であるかのように中和化される。これを想像力のアイロニーと名指すなら、教育のアイロニーに対抗しうる力も、想像力のアイロニカルな力の開放の内にあるように思われる。そこで以下では、アイロニーの概念を手引きとして、想像力の教育的・教育学的可能性についての間接的呈示を試みることにする。

さて、アイロニーといえは、直ちにソクラテスのアイロニーが思い浮かぶ。さらにシュレーゲルのロマン主義的アイロニー、キルケゴールの『イロニーの精神』、ヘーゲルの世界史のアイロニーなどが連想される。とはいえ、皮肉や逆説など様々な意味で用いられるアイロニーとは、本来は反語とでも訳すべきレトリック用語である^(注10)。Xの反対ををことさらに言い立てることによって、言質を与えずにXを暗示的に伝えようとする表現上の綾、策略のことである。それは正体を偽る不実の卑下、偽装としての謙譲などの欺瞞、あるいは真実を偽装するために偽を真であると言いくるめるソフィスティックな便法とは異なる^(注11)。アイロニーの種差的用法ともいべき皮肉や愚弄やあてこすり、反語を意図した賛辞や期待や否認などは、文字通りの表現の反対を伝えようとしている。反語としての嘘は、始めから露見することが期待されている。反語とは、露見することを期待してつく嘘であるといつてよい。

しかし、あえて真意の反対を言い立てるのは、単に言質を与えまいとする狡さなどではない。たとえば軽蔑の間接的表現としての丁寧すぎる物言いでは、それがそのまま謙譲そのものとして受け取られるならそれでお終いであるが、相手がそこに込められたアイロニーそのものを問題化するなら、その土俵では応答する用意がある。コミュニケーションにおけるメッセージの意味は、受け取りの視角によって様々に変化する。偽装による真相の隠蔽は、相手の出方次第で偽が真に、真に偽が反転するメッセージの意味の非決定性に関している。「アイロニカルな表現」とは、表現そのものにまつわる非決定の揺らぎを、そのまま引き受けようとする構えの両義性の表現である。

さらにメッセージの受け取りの非決定性は、そのまま折り返されて両者の関係の、結局は自己の存在の非決定性に反転する。アイロニーを込めて「それはそれでいいんじゃないの」と言うしかないとき、ことさらに批判したいのではない。かといって評価したいのでは毛頭ない。ここで非決定の揺らぎとは、態度決定する際に関係の揺らぎに由来する。なぜ、ストレートに表明せず、合わせ鏡の乱反射のような反転を繰り返す必要があるのだろうか？

論理的に純化すれば、Xの否定は否定Xにすぎず、さらにその否定は否定Xの抹消としてXの肯定にすぎない。あるものが猫であるか猫でないものであるかのいずれかであれば、あるものが猫でないものでなければ、それは必ず猫である。ところが現実のコミュニケーションの領域では、非Xとしての否定と反Xとしての否定は意味が異なる。さらにXの否定の否定はそのまま肯定に戻るのではなく、Xの否定に荷担しないという視点の表明にすぎないこともある。アイロニーの表現は、単に反Xを言いたいのではない。もちろんXと言いたいでもなく、むしろXの取り消しのプロセスを含めて反Xと言いたいのである。純粹無垢なXに純粋な反Xを対置して、幸福な協同作業を通してより堅固なXあるいは反Xに到達しようとするそのような土俵設定そのものから距離を取ろうとする試みといってもよい。かといって外に出てしまうのではなく、Xと反Xの反転運動を起動させ、認知のレベル間の関わり、認識と存在との絡み合いに忠実であろうとするのである^(注12)。

アイロニーにおいて、真実と虚偽、内在と超越、現実と非現実、認識と存在といった対立項は、措定と反措定の関係として二者択一的に提起されるのではない。かといって対抗を可能とする土俵を風化させて、対立を解消するのでもない。まさにこうした二重の否定でしか表現できない運動を呼び込むことによって、Xでありながら同時に反Xでありうるという別の様相が呼び出されている。非現実でありながら現実である。現実でありながら非現実である。非現実を現実であるかのように、現実を非現実であるかのように、さらに非現実を非現実であるかのように、そして現実を現実であるかのように。アイロニーとは、中和性変様として究明された想像力のある特性を、現実の関わりさなかで体現させたものである。

あえて俯瞰的に述べるなら、想像力のこうしたアイロニー、あるいはアイロニーとしての想像力が教育のアイロニーに対抗しうるのは、それが教育をめぐる諸言説の矛盾や逆説を、全体として引き受けつ問題化するからである。Xに反Xを対抗させるのでは、X対反Xの尺度そのものを問題化することはできない。疎外が常態となった状況で本来性に訴えることは、責めの気分をあまり立てて、駆り立てる気分に拍車をかけるだけである。形成に問題はあろうと、解体は積極的な解答にはならない。踊っているつもりで踊らされている、それは確かなのだが、元来が 私 は誰かあるいは何かを模倣するのとなければ、何事も表現できない。同一性への形成論は、非同一性に準拠する思考をもっては相対化されない。形成か解体かの二者択一を養分として同一性は成立しているからである。

そこでアイロニーとしての想像力は、同一性の形成論理そのものを問題化する。とはいうものの、あるいはしたがって、非同一性に同一化するのではない。同一性にも非同一性にも荷担せず、それによって かのよう という仕方で、排斥し合う両者に荷担している。それは未来を欠いた絶望的なシニシズムだろうか。それとも、中途半端な不決断だろうか。そう見たけ

れば、そのどちらでもある。しかし開かれてあるという要請に忠実であると言えば、そのどちらでもない。選択の前の逡巡は、いつもすでに選択の事実によって過ぎ去っているのだから。気づいたときにはいつだってすでに、能力を獲得し、社会に荷担し、人間を形成し、自分になってしまっている。にもかかわらず、かつての未然是既に今現在の内にある。大人への同一化のさなかに、かつての子供は生きており、男性への同一化の影に女性が潜在し、そして現実が堅固に確立すればするほど、想像界と一体化している。アイロニーとしての想像力という要請は、むしろ優れて教育的な状況を形成している現実そのものである。教育は、未然の未来、大人になりつつある子供の変容、自己に外的な何かとの同一化と距離といった、同一性の論理とは別の開かれた次元、未然の未来に準拠しているからである。

しかしこんな風に、アイロニーとしての想像力の意義を積極的に申し立てるのは、アイロニーの精神に反している。暗示的に告知されるなら、それで十分である。そこで最後に、再びフッサールに立ち戻り、残された問題、すなわち想像力の未来性について考察しておこう。

フッサールによれば、「予期直観は逆立ちした記憶直観である」(S.47)。直進する客観的時間軸は遮断されているのだから、この逆立ち、裏返し、転倒を構造上の反転と読むことにしよう。そこで原理的な相違は、「充実の仕方」(S.47)にあるといわれる。「過去志向は直観的再生の諸関連が解明されることによって必然的に充実される」(S.47)。それに反して、「未来は知覚によって充実される」(S.48)。

単純なことである。丁度10年前の今日の自分を想起してみよう。といっても何か特別の出来事でもない限り、強引な再構成によって想起するしかない。そんな風に想起された像が確かであるかどうかを決するのは、今現在にまで連続する私の生の今における痕跡間の調和にしかない。ということは、想起と、再構成ないし自由な造形としての想像とを区別するのは、志向間の相違にしかないということである。素朴にいえば、今となってはもう真相は分からない。それに対し、予期はそのうち今として現在化することを常に待ち構えている。10年先の今日の自分についての予想が、10年後に充実されるというようなことではない。予想された時点が現在化したときには、予期が体験された今は過ぎ去っており、かつての今の予期体験の充実は、その意味で想起と同型性を持つということである。

むしろ構造上の裏返しは、想起に関して区別された二重の志向、横の志向性と縦の志向性の意義づけに関するものである。想起において流れの意識をなす横の志向性は、実は想起の反復によって階層を造形する縦の統一の構成意識としての縦の志向性に支えられていた。過去把持が想起を可能にしているのだが、それがそのようなものとして知られるのは、想起という働きを通してである。同様に、未来把持と予期とを区別するなら、未来は不断に今へと到来し続け

ているのだが、それを今における到来するものの把持として可能にしているのは、すでに流れ去った過去における予期の働きということになる。

そして当然ながら、このように予期を想起の反転として記述するやり方には、どこか釈然としないものが残る。ゼノンの矢に対して、「でも現に飛んでるじゃないか」と訴えたくなるような不審の念がかき立てられる。5分前の自分の行動についての想起の確かさないし不確かさと、5分後の自分の行動についての予期の確かさないし不確かさは、そもそも質が異なる。選択できる範囲内で、選択できる自分の存在を現実化しようとする意志が介在しているからである。選択は幻想かもしれないが、選択できる かのよう に 将来を構想している。かのよう に基づくことで、予期は予想というよりも選択になる。同じことであるが、選択はいつでも かのよう に としての想像、仮構、変様の地盤によって可能になっている。過去ないし想起との構造上の裏返しというならば、それはこの地点で指摘すべきである。起源が反復と、オリジナルがコピーと通底しているなら、反復はまさに未知との出会いと、コピーは原初の創設と通底している。そのようにして、開放性は閉鎖性でもあることによって、にもかかわらず開放性である。現実性は非現実であることによって可能性である。このように想像力は時間を足がかりとして、アイロニカルに可能性の地平を創設しているのである。

〔注〕

以下の主要参考文献は、以下の数字で示す。

E.Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch*,

Husserliana Bd. , 1976.

ders., *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch*,

Husserliana Bd. , 1969.

ders., *Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*,

Tübingen 1980.

ders., *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung*,

Husserliana Bd. , 1980.

ders., *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität. Dritter Teil*,

Husserliana Bd., ,1962.

K.Held, *Lebendige Gegenwart*, Phaenomenologica 23, Den Haag 1966.

(1) 小論のテーマは、言葉の最も広い意味における想像力ないし想像する働きの究明である。したがっ

- て想像 (Imagination) は、現在しない何かを思い浮かべる働きという程度の意味において、空想 (Phantasie) や Einbildung としての想像などを包括する類概念として用いられる。概してフッサール自身は、「写像意識」(Bildungsbewusstsein) と並んで「空想」(Phantasie) を用いるが、フッサールも、Imagination と Phantasie を種差的对立させて用いることはない。厳密にはマールバッハのように「直観の準現前化作用 (Vergegenwärtigungen) の現象学」(Einleitung des Herausgebers, S.L) のように、準現前化作用によって総称させるのが正確ではあろう。
- (2) 「構想力は、…感性をアприオリに規定する能力である。カテゴリーに従った構想力による直観の総合は、構想力の超越論的総合でなければならない。これは感性に及ぼす悟性の作用であり、…」(Vgl. I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner, Hamburg 1976, S.167)
- (3) フッサール自身は、Phantasie の様相の種差的区别を論じてはいない。彼が問題にするのは、例えば準現前化 Vergegenwärtigung における Phantasievorstellung と Bildvorstellung などの相違である (Vgl. S.71ff.)
- (4) S.263. さらにイデーナ では、「すべての中和化された直観からは、根源的に理論的 (信憑的) 可能性が引き出される」(S.262) と述べられているが、逆に言えば、可能性は可能存在という一つの定立であるから、中和化された意識は、可能性の意識とは異なる。
- (5) 以下の時間性をめぐる考察では、フッセリアーナ に収められた草稿を参照しながらも、主として『内的時間意識の現象学』を主題的に取り上げる。さらに、『生き生きした現在』(K. ヘルト) における見事な整理を参考にした。
- (6) Vgl. Beilage 「意識流の二重の志向性」, S.103ff.
- (7) Vgl. Beilage , S.97ff.
- (8) 「こういったことすべてを表す名称が、我々には欠けている」(S.63)
- (9) 「それは絶対的主観性であり、…種々の絶対的特性を備えている」(S.63)。さらに では、「究極の還元」における「絶対的反省」が見出す「絶対的な原初の生、原初の我在り、原初の流れ」などといわれている (S.585)
- (10) 佐藤信夫『レトリック認識』(講談社 1992年), 第7章「反語」219 - 253頁 参照。
- (11) V. ジャンケレヴィッチ『イロニーの精神』(筑摩書房 1991年) 参照。「イロニーはその偽りの真理の無意味さを暴露し、不条理性を自己反駁に誘い込む。換言すれば、イロニーは不条理自体にその不可能性の証拠を提出する役目を負わせる」(同書137頁)
- (12) アイロニカルな表現においてそのように認識と存在との絡み合いが生じるそもそもの原因、また表現や表現の受け取りにおける非決定性が生じる原因は、そもそもアイロニカルな表現が、メッセージでありながら同時に当該メッセージについてのメッセージでもあるからである。そこには自己言及性の逆説が伏在するのである。